

# モンゴル牧民の移動ルート選定の安定性

— モンゴル国スフバートル県の事例 —

尾崎孝宏

## はじめに

本論の目的は、タイトルにある通り、モンゴル牧民の季節移動のルートが、年によってどの程度変動するかを、モンゴル国スフバートル県オンゴン郡における夏営地を例として、実証的に検討することにある。ただし、本題に入る前に、この問題に関する、現在までの研究状況について述べておきたい。

従来、モンゴル牧民の季節移動、特に営地の場所の長期的な（＝年単位の）変動に関しては、研究者の間で、著しい見解の相違が見られた。つまり、一方では例年、基本的に営地の場所は変動しないとする「営地固定論」とでも呼ぶべき見解が存在し、他方ではそれとは正反対に、年々の営地選定には全く規則性は見られず、不規則な彷徨に近いとする「営地ランダム論」とでも呼ぶべき見解までが存在するのである。そして、現在なお、この問題に根本的な決着はついていない。むしろ、この問題を正面から扱うのを避け、あまり明確に述べないでおくのが現在の趨勢となっているように思われる。例えば、最新のモンゴル概説書である金岡秀郎著、『モンゴルを知るための60章』には、以下のようない記述が見られる。

季節ごとに移り住んで過ごす牧営地は、春営地・夏営地・秋営地・冬営地と名づけられている。春夏秋の牧営地は必ずしも一定しないが、冬は寒さをよける家畜の囲いを例年利用するので、毎年同じ所に戻ってくるのが普通である。（金岡 2000：60）

この記述で明記されているのは冬以外の営地は「必ずしも一定しない」こと

であるが、これは当然、「基本的には一定であるべきなのだが」という意味を言外に含んでいる。また、同様の概説書であるが、記述の対象をよりモンゴル国に限定した『モンゴル入門』では、三秋尚が次のように述べている。

四季の牧地は地形・水源・植生、気象の諸条件を考慮して決められる。冬営地は地形的に北西風を防ぎうる、雪の少ない、暖かい南向きの斜面である。春営地もほぼ同じ条件であるが、越冬した家畜の体力を早く回復させるため、萌芽の早い牧草地が適する。夏営地は川筋・湖・泉の周辺が選ばれる。家畜用飲み水のくみあげに人力のかかる井戸を避けるためである。秋営地は越冬のためのエネルギーを蓄え、肥育の仕上げを行うから、牧草の質と量の良いことが特に条件となる。

営地間の移動は、平原では冬が暖かく、夏は涼しい場所を求めた水平移動である。一方、高海拔山岳地では垂直移動である。夏は涼しくて蚊や蠅の少ない高所、冬は気温の下がらない中腹部、春と秋は山岳底部である。

(三秋 1993 : 81-82)

これを読む限り、各季節の営地の場所は年によらず一定しているような印象を強く受けるが、実際には「一定である」という直接的な言及は見られない。ただ、地形が年により変化することは我々の常識から考えられないため、読者には一定であるかのように理解される、という微妙な文章になっている。

上記2例から、どちらかといえば「営地固定論」に近いものの、完全に一定であると断言することは避ける、というのが現在、営地の変動に関する一般的な論調であることが確認できる。この論調の問題点は後で検討するが、その前に、その他の論客の主張も踏まえておきたい。

### 営地ランダム論と営地固定論 —— 梅棹説を中心に

まず、「営地ランダム論」の急先鋒とも言える梅棹忠夫の主張は、以下の通りである。彼は、従来のモンゴル遊牧の研究では、「かれらの遊牧移動は、規則ただしい季節移動であって、むかしの漢民族がかんがえた『水草を追うて遷

徒す』ということばがしめすような、でたらめの方向ではない」(梅棹 1990 a : 46)とされてきた; という認識を示した上で、「どうもモンゴルの遊牧移動は、そんな規則ただしものではないのである。わたしはたくさんのアイル(世帯: 引用者注)についてこの数年間の遊牧移動のあとをたどり、地図上にプロットしてみたが、そういう規則性はほとんどない」(梅棹 1990 a : 46)と論断している。ただし、梅棹が言及している、遊牧移動のあとをプロットした地図は、現在に至るまで公表されておらず、個々の世帯、つまり梅棹の言うアイルの具体例も紹介されていない。

さらに、梅棹は四季の営地に関しても「冬営地ということばがある。しかしそれは、ことしはどこで冬をすごした、ということを書いてあるのであって、そのアイルにとって、毎年決まった冬営地があるのではない。夏営地も、『ことしは、どこそこが夏営地になった』ということの意味するので、きまった夏営地があるわけではない」(梅棹 1990 a : 46-47)という、独自の見解を示している。梅棹は、自身の論拠としては、「こんな大平原で、多少の南北移動を行ったとしても、それが冬あたたかく夏すずしい場所をもとめることにならないのは、あきらかなことである。数十キロを移動したところで、気候がかわるわけでもないし、季節移動の意味をなさない」(梅棹 1990 a : 47)点を指摘している。

しかし、梅棹の先行研究に対する認識は、やや一面的に過ぎるきらいがある点は否めない。確かに、梅棹が実名を挙げて批判している後藤富男は、彼のモンゴル研究の集大成である『内陸アジア遊牧民社会の研究』において、以下のように、梅棹が批判した通りの「規則ただし季節移動」的な認識を示している。

農耕社会の人々の目に、家畜を伴侶として草原を移ろい歩く遊牧民の生活が、あたかも胡砂吹く風のままにころがる根なしのマリヨモギのごとく、あてもない漂白と映じたのは、むしろ当然というべきであった。

(後藤 1968 : 19)

遊牧が夏营地と冬营地とのバランスの上に成り立つことは、すべてに共通している。遊牧的移動とは、要するにこの間を往復する振り子運動にも譬えられよう。いつごろ、どんな牧草を与えねばならぬかというような放牧場の必要をみたすことは、十分に知悉した土地でなければこれをなしたい。したがって、その経路もまた大体慣習的に決まっており、特別の理由がない限り年々踏襲されるのである。(後藤 1968 : 27)

このほかにも、1945年以前の日本人による現地調査報告の類では、特に古いものになるほど「营地固定論」に近い論調が大勢を占めることは否めない。古い例では、『東蒙古』(1915年発行)の「移住の区域は略ほ一定しありて随所に転居するものにあらず」(関東都督府陸軍部 1915 : 53)という記述が見られる。また、前掲書より20年ほど時代が下った、南モンゴル北部のホロンバイル地方に関する調査報告書である『呼倫貝爾畜産事情』(1938年発行)では、夏期放牧地と冬期放牧地の条件を列挙した上で「以上の諸条件に基いて蒙古人は春夏秋冬家畜を放牧し、遊牧生活を営むものであって、毎年特殊事情の起こらない限り或る一定圏内を一定期間内に移動する」(満鉄鉄道總局 1938 : 27)と結論付け、前年の营地と同じ場所に移動せざるを得ない根拠として、「万一遊牧圏内に於て例年の遊牧コースを変更する時は、直接彼等の燃料問題の解決に非常な困難を招来せしめる」(満鉄鉄道總局 1938 : 27)と、牧民が燃料として家畜の糞を利用する点を指摘している。

しかし、当時の日本人によるモンゴル研究において、すべての論調が上述のような典型的「营地固定論」であったわけでもない。例えば、上述、『呼倫貝爾畜産事情』の言及範囲であるホロンバイル新バルガ右翼旗で現地調査を行った竹村茂昭は「夏は河の近く、冬は雪の少ない所と云ふ様な大体の区域はあるが、其の中のコースは必ずしも一定しない」(竹村 1940 : 13)と、厳密な「营地固定論」の立場に立つことは避けているし、梅棹と同じくシリングルの現地調査に基づいて書かれた『蒙疆牧野調査報告』では、次のように、明確に従来の「营地固定論」が批判されている。

蒙古人は意識的に同一経路を取るものではなく、唯草生と水並に曹達湖の状態によって、その良好なる地方を選び随意に移動するのであるから、草生の如何、水及雪の状態によっては年により必ずしも同一地方を選ぶとは限らないのである。亦燃料に就いても新鮮なるものは使用できないが、前々年或それ以前のものを使用できるから、路を毎年一定にするとは限らないと云ってゐる。(満鉄北支経済調査所 1940:39)

もとより、ここでは積極的な「営地ランダム論」が展開されているわけではない。むしろ、現在の論調に通じる「営地固定論」の弱いバージョンとでも呼ぶべき位置付けが妥当であろうが、年々の自然条件の変動状態如何によっては、限りなく「営地ランダム論」に近づきうる。特に、小長谷が述べるように、モンゴルを「夏営地と冬営地を交換することもできるほど、両者の差異が微妙である」(小長谷 1996:11)、すなわち、一定地域内の自然条件が均質とは言わないまでも、差異の微小な空間として想定するならば、上の論を「営地ランダム論」の弱いバージョンと言っても、あながち的外れではあるまい。

## 北モンゴルに関する研究

一方、北モンゴル、即ちモンゴル国に関する研究に目を転じると、こちらは現在に至るまで「営地固定論」が基本的に卓越している。まず、モンゴル国における民族学の概説書である『モンゴル人民共和国の民族学1』では、モンゴル国の多数派を占めるハルハ族牧民の革命前(19-20世紀)の移動状況について、「牧民には冬営地・夏営地は一定の地点があるのに対し、春営地・秋営地に一定の場所がなかった」(バダムハタン(編) 1987:69)と述べている。夏冬の二季節にせよ、営地が一定であれば、季節移動が「不規則な彷徨」にはなり得ないため、これも一種の「営地固定論」といえよう。

さらに、上述のような概況の説明ではなく、ハルハ族居住地域の中央部に位置する南ハンガイ県での現地調査に基づいて言及する小貫雅男の場合、その論調はより強いバージョンの「営地固定論」へとシフトする。彼は、「数名の年

寄りたちの回想をもとにして、できるだけ個別的なものは避け、共通する属性に留意して、一般的な概念に抽象するよう心がけたつもりである」(小貫 1985: 47) と断った上で、次のようなモデルを提示している。

森林におおわれた山岳地帯(ハンガイ: 引用者注)があって、その南麓からは広々とした半砂漠性の草原が広がっていて、その10~20キロ南には、川が流れているといった地形を想定していただきたい。

このような地形は、遊牧が行われる土地としては、モンゴルでは典型的なものともみてよいであろう。(中略)

山中の南斜面に冬営地が選定される。(中略)ここを起点に、半砂漠性の草原を南に向かって移動しながら、10~20キロのところにある川筋の草地に、夏営地をおくのが普通である。この冬営地と夏営地の途中の南麓に春営地を選び、夏営地から再び冬営地にもどる途中に、秋営地を選ぶことになる。

天候の一大異変がない限り、このような冬営地—春営地—夏営地—秋営地の遊牧循環を毎年くりかえすことになる。(小貫 1985: 48-49)

ここで展開される「営地固定論」は、まず第一に、前提となるモンゴルの地形に対する認識からして、梅棹の「数十キロを移動したところで、気候が変わるわけでもない大平原」という認識とは大きく異なっている。むしろ、山岳地帯や川など、地域内の自然条件の差異を利用し、季節ごとの適地を定期的に巡回している牧民像が、この描写からは立ち現れてくるのである。

一方、同じハルハ地域でも、西部に位置する旧ナロバンチン寺領に関する、亡命活仏ディロワ=ホトクトからの聞き取り調査に基づくヴリーランドの報告は、弱いバージョンの「営地固定論」に近い。なお、自然条件としては小貫の調査地と同様、北に山岳地帯(ハンガイ山脈)があり、南に川(ザブハン川)が流れている。ただし、旧ナロバンチン寺領の方が、山岳が圧倒的に急峻であり、低地と高地の標高差が大きくなっている。

冬営地の最低必要条件は、家畜囲い、草、そして水である。これらの必

要条件は、高い山の南麓と川沿いの低地の近辺が最も満たしていたようである。(中略) ホトアイルは普通、そのような冬営地を幾つか持っており、それぞれに石囲いと糞の堆積がある。例えば、インフォーマントの家族は寺の周り、1/2～3マイルの距離に4、5箇所<sup>1)</sup>の冬営地を持っていた。同じ年に全ての営地が使用されるわけではないが、適当そうなものを選んで二つ使うことはしばしばある。

夏営地の必要条件も草と水であるが、家畜囲いは重要でない。夏の草原は泉や融雪のような水源の近くに位置している。一般的に夏の放牧に冬営地を使用するのは好まれず、ほとんどの家族はこれを行わない。夏の移動パターンは個々のホトアイルが所有する家畜の種類や量、年々の雨量に影響される。雨量が豊富な年は分散する傾向があり、豊かな家族は井戸や泉があつてしかも涼しい高原に上り、貧しい家族はザブハン川の近くに留まる。乾燥した年には、山地は非常に乾燥するため、全ての家族が富に関係なく川へ下りてこなければならぬ。(Vreeland 1954: 42-43)

グリーンランドの場合、アメリカで聞き取り調査を行った関係上、インフォーマントの選定には選択の余地がなかった。当時は冷戦の時代であり、モンゴル族居住地域はソビエト連邦(ブリヤート共和国)、モンゴル人民共和国、中華人民共和国(内モンゴル自治区)と、全て社会主義陣営の内部にあつたため、グリーンランドのインフォーマント3名は、いずれも徳王政権関係者で、蒋介石とともに台湾へ逃れた人々であつた。そのため、デイロワ=ホトクトも「ハルハに典型的な自然環境を持つ地域」の出身者だつたために選ばれた訳ではないのだが、彼の証言は、凶らずも小貫が言うような「典型的地形」の一バリエーションにおける移動状況を示している。ただし、季節移動の詳細に関しては、乾燥した年のみ小貫のモデルに一致するようである。

なお、先述の『モンゴル人民共和国の民族学1』には、ハンガイにおいては、夏に山麓や川沿いへ下り、冬には山中へ上がるという記述につづき、平原地帯の移動では、夏は涼しいハンガイに上がり、冬になると暖かい平原地帯やゴビ

へ移動したという記述も見られる（バダムハタン（編）1987：69-70）。この記述は、前者がより山深いハンガイ地域を、後者は小規模なハンガイあるいはハンガイ地域の周縁部に隣接する平原地帯を想定しているものと想像されるが、そのように明言しているわけでもないので、原文のままでは論理的整合性に欠けている。しかし、この点を上述のように補足することが許されるなら、モンゴル国の研究者たちは、ヴリーランドの挙げている両パターンを、ありうる移動として認めているのだと解釈できよう。

### ハンガイと平原——代表性をめぐる問題

さて、再びここで、梅棹の論考へと話を戻そう。梅棹は、「営地固定論」を「遊牧についてのヨーロッパ人の認識」と位置付けており、その上で、この認識の由来について、以下のように推測している。

西からきて、アジアの遊牧社会に接したヨーロッパ人が、最初にみたのは、西南アジア、たとえばイランのカシュガイやバクチアリの遊牧ではなかったかとおもわれる。（中略）かれらは、夏はすずしい高地に家畜を放牧し、冬は山をおりて、あたたかい平地に家畜を放牧する。（中略）そのために、遊牧といえば、このような規則ただしい季節的上下移動だということおもいこみができてしまったのではないだろうか（梅棹 1990 a：47）

しかし、これもやや勇み足の感がある。少なくとも現在、誰もが文句なく「モンゴル」であると認めるモンゴル国のハルハ地域においては、どこまで規則的であるかはさておき、高度差を利用した移動が行われてきたことは、上述の引用などから見ても、疑いないようである。無論、梅棹の時代、日本人がモンゴル人民共和国で現地調査を行うことは望むべくもなかったため、梅棹にとってのモンゴルが「大平原」であったことは、ある意味でやむを得ない。また、ロシアの研究者はハルハ地域をメインに研究していたために、欧米で読まれるモンゴル関係の文献は、アクセスの問題からハルハに関するロシア人研究者の著作が必然的に多くなることも事実であり、この傾向は前述の、3人のインフォー



マントのうち2人が南モンゴル出身者であったヴリーランドの研究で挙げられている文献リストからも看取できる (Vreeland 1954 : 321)。そして、それゆえに、ヨーロッパ人のモンゴル認識がハンガイを前提とした「営地固定論」へと傾斜しがちであることもあり得よう。

さらに、梅棹によれば「自分の観察よりも、文献の方が尊重され」（梅棹 1990 b : 187）ていた、1945年以前の日本人による南モンゴル研究が、ヨーロッパの文献からの影響を受けている、とする梅棹の位置付けは、本来南モンゴルにおける実証的研究から出発したはずの後藤富男が、実に多くの欧米人研究者の文献を参照している点から判断しても、故無しとはいえない。だが、ひとたび「モンゴル」という語で総括しようとするや否や、梅棹の主張には、現在の見地からすると、無理が生じてしまうのもまた事実である。

そもそも、ハンガイと大平原の、いずれがモンゴルに典型的な景観なのかという問いは、実は、モンゴルという地域をどこからどこまでに設定するか、という問題と密接な関係を有している。というのも、前者は北モンゴル、特にモンゴル国の首都ウランバートルを含むハルハ族居住地域における典型的景観であり、後者はむしろ南モンゴル、特に現在もおお牧畜の中心地であるシリングルやホロンバイル地方における典型的景観だからである。それゆえ、この手の問題は、純粋に学問的な問題というよりは、むしろ政治的な問題、つまりいずれが「正統なモンゴル」であるか、として立ち現れがちである。もとより本論では、南北モンゴルのヘゲモニー争いに荷担するつもりは毛頭ないので、いずれが「真の典型」であるかを論じるつもりはない。ただ、確実に言えることは、ハンガイと大平原では、それぞれ異なった原理に基づいて移動が行われており、この差異は、さしあたり「モンゴル」牧民の季節移動のパターンを一般化する試みは放棄したほうが無難であると思えるほど大きい、ということである。

### 平原地帯における営地ランダム説の妥当性

しかし、これではまだ、問題が残っている。梅棹の「営地ランダム説」の論

拠となっていた「モンゴルは大平原である」という論断は、モンゴル一般に必ずしも該当しないものであるにしても、平原地帯においては「営地ランダム論」が妥当なのか、という点である。だが、現在のところ、「営地ランダム論」を積極的に支持する論客は見られない。この理由はいくつか考えられるが、まず第一に梅棹自身が具体的なデータを提示していないために、彼の主張の妥当性が確認できない上、彼の「営地ランダム説」が初めて文章化されたのが『梅棹忠夫著作集』、つまり彼の調査から50年以上を経た1990年の著作であった事も一因となっている。後者に関しては、単にタイムラグの問題ではなく、1990年代に南モンゴルでは牧地の世帯単位での分割が行われた結果として、季節移動が行われなくなりつつあり、もはやこの論点に関する追加調査が実行不可能になってしまっている、という現状が我々の前に立ちはだかるのである。

また、筆者自身もフィールドでしばしばインフォーマントから耳にするのだが、当のモンゴル人が「営地の場所は大体一定である」（後述の事例11を参照）との自己認識を持っているため、そうしたインフォーマントの発言を聞いた現地調査者が「営地固定論」を受け入れやすい、ということもまた事実である。無論、梅棹が調査した頃のシリングルの牧民が季節移動についてどのような自己認識を持っていたか、現在となっては知る由もない。そのため、シリングルの大平原の延長上に位置する筆者のフィールドである、ダリガンガの牧民が今日「営地の場所は大体一定である」と述べるのは、あるいはハルハ族を中心とするモンゴル（人民共和）国の長年にわたる教育の成果であろうか、という疑念を完全には払拭し得ないが、少なくとも、現在得られるデータからは、平原地帯の牧民からさえ「営地ランダム論」を支持するような発言は聞かれない。

そのため、梅棹の「営地ランダム論」は、現代のモンゴル研究者にとって言及に値しないと見なされているようであり、放置、つまり無視されているのが現状で、賛意はもとより、反対意見すら呈されていない。ただし、平原地帯までを視野に入れると、ハンガイを想定した「営地固定論」の「例外的」事例が、より簡単に見出しうることも事実であるし、現地の牧民にも、そのような現状

にそぐわない「教科書的」な説明をする者はさすがに存在しない。

ここで、再び、本論の最初の引用文献に戻ろう。三秋尚の記述は、平原への言及があるので、モンゴル国南東部の平原地帯に配慮したものであることは明らかであるし、南モンゴルをも含む「モンゴル一般」の記述である金岡秀郎もまた然りであろう。つまり、概説書における記述は、弱いバージョンの「営地固定論」にせよ、あるいは営地固定論を想起させる曖昧な記述にせよ、「モンゴル」という単一の名称とは裏腹の、多様な季節移動の現状を表現するための窮余の一策として選択されたものである、といえる。要するに、具体例は「いろいろあるのだ」と述べることで、多様な可能性に備えているわけである。

だが、そこまでして行う概括は、一見した情報量の多さとは裏腹に、極めて無責任な記述なのではないだろうか。確かに、モンゴルの多様な現実と照らし合わせて、極力反例の出ない記述を目指せば、上述のようにまとめざるを得ないことは事実である。しかし、仮に「営地固定論」や「営地ランダム論」というような、定性的な議論だけでは説明しきれない多様な現実がモンゴル牧民の季節移動にあるとしても、それは多様な現実が等価で並列され、どれが選択されるかは全くのランダムである、ということにはならないであろう。ある移動パターンを選択する牧民の側には、それなりの動機や理由付けが存在するであろうし、地域的な環境もまた、彼らの選択の背景として少なからぬ影響力を持っていることが予想される。

だとすると、ある地域を区切って考えれば、そこでは決して、あらゆる可能性に対して等しく開かれているわけではなく、確率論的には、起こりやすい現象を見出すことはできるのではないだろうか。ただし、それを明らかにするには、定量的な分析が不可欠だろう。

ところが、従来、営地の変動に関する議論で、实例などの具体的なデータを挙げているものは皆無なのである。もとよりこれは、各論客が、自然環境などの諸条件から演繹的に営地の変動の可能性を論じていることを意味するわけではない。恐らく、論客は皆、梅棹のように、自身は何らかのデータは持ってお

り、それに基づいて結論を出しているのだろう。ただ、読者には、それが全く公にされず、結論のみが当てがわれているため、定量的な再検討の余地がないだけである。だが、これは、決して看過できない問題である。

かつて、梅棹は、「内蒙古牧畜調査批判」という文章の中で、1945年以前に日本人によって行われた、南モンゴルにおける牧畜に関する調査・研究の「科学的精神の欠如」（梅棹 1990c:169）を痛烈に批判した。また、「乳をめぐるモンゴルの生態Ⅰ」という論文では、乳および乳製品に関する過去の研究に共通する「科学的な研究としては致命的な」欠点として、第一に「事実の観察と記載が不足である」ことを挙げている（梅棹 1990b:186-187）。ところが、本論で扱う問題に関する限り、他の論客と同じく梅棹までもが、今のところ「事実の記載不足」のそしりを免れ得ないのが現状である。

### 本論の調査地について

そこで、本論では、筆者自身がモンゴル国スフバートル県オンゴン郡で1997年7月、1998年8月、1999年7-8月に行った現地調査の資料から、夏営地の場所に関する具体的なデータに基づき、いわば実証的な当地論の構築を試みる。なお、上述したように、スフバートル県オンゴン郡における移動状況に関する現地の牧民の自己認識は「営地の場所は大体一定である」というものである。そのため、本論の力点は、この言説を出発点として、「大体」の内実を明らかにするとともに、その背後にある論理を考察することに置くことにしたい。

中心となるデータは、1998年に訪問調査を行った19ホトアイルのうち、1999年にも訪問ないし所在確認のできた17ホトアイルである。なお、このうちの2ホトアイルは、1997年にも訪問調査を行っているため、3年分の夏営地の所在地が確認できている。なお、各事例の牧民が所属するバグは、牧民のバグである第1～第3バグがそれぞれ5事例、5事例、6事例とその大半を占め、それ以外に本来郡中心地の住民のバグである第5バグが1事例あり、職業軍人のバグである第4バグの事例は存在しない。

なお、各年は、同じ夏といっても、気象条件が大幅に異なっていたことは特筆に値するので、ここで簡単に紹介しておきたい。1997年は、非常に高温・乾燥した年であり、例年であれば、夏でも最高気温が27度を上回る事は滅多にない、と現地のインフォーマントが言うオンゴン郡で、連日30度以上の日が続いており、雨の少ない早魃状態であった。後述するように、現地の牧民の中には、早魃で牧草の状態が良くないため、7月中旬から家畜を連れて営地を離れる「オトル」に出る者もいた（後述の事例2を参照）。

1998年は、一転して低温・湿潤な年であった。この年は、6月の羊の毛刈り直後に冷たい雨が2日間降り続いた。牧民はすでに夏営地に移動していたが、夏営地には簡単な家畜囲いがあるだけで屋根がないため、毛刈り直後の家畜が大量に死亡した。オンゴン郡の第1バグ長によれば、被害の激しかったのはオンゴン郡と南東に隣接するナラン郡であり、オンゴン郡で約8000頭、ナラン郡でも数千頭の家畜が死亡し、スフバートル県全体での被害頭数は2万頭に上ったという。具体的な事例を挙げると、後述する事例12のホトアイルでは、6月に、夏営地で雨に遭ったが、夏営地には本格的な家畜小屋は存在しないために、ホトアイルで所有するヒツジ・ヤギの約1/4に相当する、380頭が死亡した。

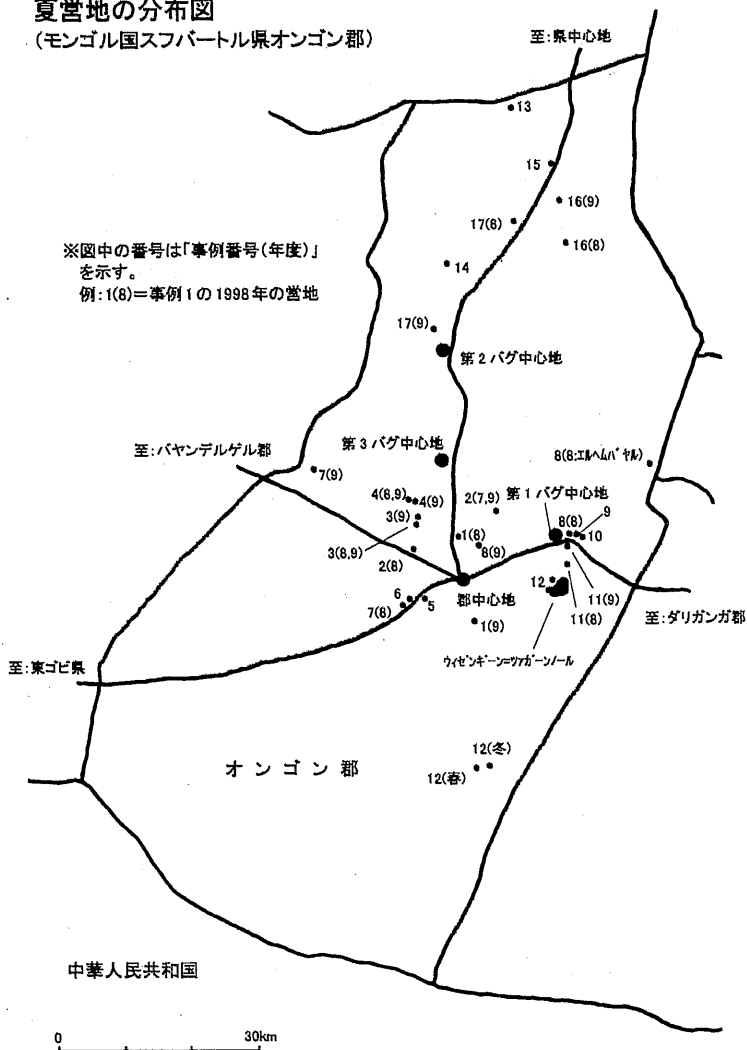
また、県中心地と各郡を結ぶ道路は全て未舗装であるため、降り続く雨で泥濘化し、筆者の調査中、軸重の重いタンク車がスタックして立ち往生した結果、オンゴン郡および隣接するナラン郡の両郡でガソリンが枯渇するという事態に見舞われていた。ただし、牧民は、雨が多ければ草生が良く、家畜に飲ませる水源となる湖が増えるため、前年と比較してはるかに「良い夏」である、という認識を持っていた。

1999年は、一年前とは打って変わり、再び乾燥した年であった。筆者がオンゴン郡へ到着した時、すでに30日間降雨がない、とソム中心地在住のインフォーマントが語っていた。ただし、気温は1997年ほど高温ではなく、現地の人々は、本年の夏はやや早魃気味である、あるいは、7月11-12日に行われた郡のナードムダム以後、早魃になりつつある、と認識していた。なお、東隣のダリガンガ郡

はこの年、「アルタンオボーのナーダム」と呼ばれる大規模なナーダムが行われたが、その調査に筆者が訪れた際、ダリガンガ郡ではオンゴン郡以上の旱魃に見舞われている、とラマでもある現地のインフォーマントが語っていた。

### 夏営地の分布図

(モンゴル国スフバートル県オンゴン郡)



## ホトアイルの実例

### 事例1（5バグ、代表者モーノンファー）

1998年

郡中心地の北6キロ程度、県中心地へ向かう道沿い。ホトアイル構成はゲル2つだが、居住世帯は1つ。モーノンファーの妻は郡中心地にある中学校の教師のため、夏は草原にいるが、その他の季節は郡中心地の固定家屋に居住。また、モーノンファー自身も冬は郡中心地で過ごし、二人の息子だけが草原で家畜を放牧していた。

1999年

昨年モーノンファーが夏営地を構えた場所には、他のホトアイル（ゲル3つ）が存在。そのホトアイルの主人によれば、モーノンファーのホトアイルは、郡中心地の数キロの地点に行っている、との事であった（現地は未見）。

### 事例2（3バグ、代表者アムラー）

1997年

郡中心地から北東方向11キロの場所、地名は「ツァーガンシャンド」で、白い泉という意味だが、ホトアイルの近くに実際にそういう泉が存在し、飲料水を得ている。ホトアイル構成はゲル2、居住世帯も2つ。

1998年

郡中心地の北北西9キロの地点で、バヤンデルゲル郡に向かう道から北に300メートルほど入った場所。地名は「ハルガイト＝ゴー」、一面にターナ（にらの一種）の花が咲いている。ホトアイル構成は変更なし。

1999年

1997年と同様、郡中心地の北東11キロの「ツァーガンシャンド」。アムラーによれば、営地の場所は、水の状態によって変化し、去年の場所「ハルガイト＝ゴー」は、今年は「水が悪い」、つまり水の確保が難しいのだという。また、ここでいう水とは、主に家畜用の水である。ホトアイル構成は

変更なし。

### 事例3（3バグ、代表者ラムジャブ）

1998年

アムラーのホットアイル（事例2）から北へ4キロ、北方に湖が見える場所。地名は「ボランギーン＝ホル」、ホットアイル構成はゲル5つ、4世帯。現在は全ホットアイルで一緒にいるが、春営地、冬営地ではホットアイルを分割する可能性が高い。ただし、分割しても近くに滞在。分割するかどうかは水・牧草の状態による。

1999年

去年の営地より1キロ東に行っただけであり、「同じ場所」と認識している。営地にはゲル3つ、2世帯のみであり、昨年ラムジャブと同じ場所に滞在していた2世帯（ラムジャブの次男と三男）は、北2キロの場所に、2世帯でいる。冬営地では、4世帯が再び集結の予定だが、春営地では2世帯ずつに別れ、3キロくらい離れて営地を構え、2世帯が不妊群、2世帯が母子群を放牧する。

### 事例4（3バグ、代表者チミッドダシ）

1998年

ラムジャブのホットアイル（事例3）から北へ約5キロの丘の上。地名は「デルセン＝ホダグ」。訪問したのは秋営地だが、夏営地もすぐ近くにあった、との事。ホットアイル構成はゲル5つ、3世帯。

1999年

去年の訪問場所と1キロと離れていない場所に滞在。営地にはゲル2つで、ラムジャブの世帯のみ。去年一緒だった弟と長男の世帯は東約2キロの地点に滞在。ホットアイル分割の理由は、今年は雨が少ないため。ここを営地として選択した理由は、近くに湖があるから。なお、冬になれば再び一緒に放牧すると思う、というのがチミッドダシの認識。

### 事例5（3バグ、代表者ツェベグ）



1998年

郡中心地から西南西6キロ、東ゴビ県へ向かう道から遠くない「ドゥルブンホダグ」という場所。ホトアイル構成はゲル3つ、2世帯。秋営地も同じ場所でも移動しない。この年は、7ホトアイルが、「ドゥルブンホダグ」に夏営地を構えているが、数は年によって変動する、との事。

1999年

昨年の訪問箇所と数100メートルしか離れていない。地名はもちろん、「ドゥルブンホダグ」。前年と同じ場所には設営しないものだが、とツェベグは述べていた。ホトアイル構成も変動なし。

#### 事例6（3バグ、代表者ゴンボ）

1998年

営地は「ドゥルブンホダグ」。ツェベグのホトアイル（事例5）の西南西約2キロ。ホトアイル構成は、ゲル5つ、4世帯。

1999年

昨年の位置より西に1キロ弱の地点だが、地名は「ドゥルブンホダグ」。彼ら自身は、同じ場所に営地を構えている、という認識。ホトアイル構成も変化なし。昨年、「ドゥルブンホダグ」に滞在していたホトアイルのうち、本年も「ドゥルブンホダグ」に滞在しているのはツェベグとゴンボのホトアイルのみ。なお、昨年は別の場所にいたホトアイルが2つ、本年は「ドゥルブンホダグ」に来ている。

#### 事例7（3バグ、代表者バートル）

1998年

営地は「ドゥルブンホダグ」。ゴンボのホトアイル（事例6）の南西1キロほど。ホトアイル構成は、ゲル4つ、3世帯。バートルは24歳だが、2年前に父親が死亡したため、ホトアイルの代表者となっている。

1999年

郡中心地から30キロ北西、地名は「ホラール」。ここは家畜に飲ませる水

が得られる湖・池が多く、草の状態も良いために来た。なお、昨年一緒だったバートルの母親の弟は、このホトアイルから別れており、ホトアイル構成はゲル2つ、2世帯となっていたが、母親の弟の所在地は未確認。

#### 事例8（1バグ、代表者オチルバト）

1998年

地名は「イフボラギン＝ズーンシレー」。これは第1バグ中心地「イフボラグ」の東にある台地、という意味に解釈できるが、オチルバトの営地は「イフボラグ」から東北東へ2キロ離れている。ホトアイル構成は、ゲル2つ、2世帯。なお、「イフボラグ」の南には同名の泉があり、この付近に住んでいる牧民の水源となっている。

1999年

地名は「イヘル＝ツェンゲレグ」、郡中心地から北東へ5キロの地点。ここは、多くのホトアイルが集中する「イフボラギン＝ズーンシレー」と対照的に、周囲にホトアイルが見当たらない。ホトアイル構成は、本年3月より知人のエルヘムバヤルおよび彼の息子の世帯を加えたゲル4つ、4世帯となっている。エルヘムバヤルの昨年の夏営地は、バグ中心の北東、ダリガンガ郡との境界付近。来年の春営地に入る際には、家畜が多くて牧地を痛める恐れがあるため、別れる予定。なお、オチルバトは例年の春営地の箇所は不定、エルヘムバヤルの春営地は郡中心地の南約12キロの地点にある。

#### 事例9（1バグ、代表者アビル）

1998年

地名は「イフボラギン＝ズーンシレー」、オチルバトのホトアイル（事例8）から北東へ1キロ弱。ホトアイル構成はゲル5つ、4世帯。

1999年

地名は「イフボラギン＝ズーンシレー」、昨年の営地から100メートル南へずらしたという。ホトアイルは、郡中心地に住んでいたアビルの長男と、

独立して種オス畜を専門に放牧していたアビルの娘婿の世帯が加わり、ゲル7つ、6世帯へと拡大していた。

#### 事例10（1バグ、代表者ダムディン）

1998年

地名は「イフボラギン＝ズーンシレー」、アビルのホトアイル（事例9）から東へ約2キロ、アビルの隣の隣にあるホトアイル。ホトアイル構成はゲル3つ、2世帯。

1999年

昨年と同じく「イフボラギン＝ズーンシレー」。少しだけ場所をずらしてあり、本年はアビルのホトアイルからの距離は約1キロ。ホトアイル構成は昨年と変わらず。

#### 事例11（1バグ、代表者ツェンデー）

1998年

地名は「フルデン＝デルス」、第1バグ中心地の南南東約4キロ。ホトアイル構成はゲル1つ、1世帯。飲料水は、西にザミン＝シャンドという泉があり、そこを使用。家畜用は天水（＝湖沼）による。

1999年

第1バグ中心地にある唯一の建物である、バグ長の家の南400メートルくらいの地点、泉の「イフボラグ」のすぐ北、地名も「イフボラグ」。去年の営地は湖の近くにあり、今年はハエ・蚊が多いため、今年はここに移動。ホトアイル構成世帯はゲル3つ、3世帯に増加。ボル、アサルマーという人物の世帯と一緒に営地を構えているが、ツェンデーは極貧である上に目も悪く、この調査に同行した第1バグ長も、ツェンデーを助けるために残りの2世帯とホトアイルを組ませた、という内容の発言をしていたため、これを「ツェンデーのホトアイル」と呼ぶのは不適當であろう。なお、この3者間の親族関係は未確認だが、アサルマーは隣県のドルノゴビ県の出身である。

また、アサルマーは、夏営地の場所というのは大体決まっており、慣れた場所からあまり遠くへは出かけないものだ、と語った。

#### 事例12（1バグ、代表者ボルガリド）

1997年

地名は「エンゲルブルド」。ウィゼンギーン＝ツァガンノールという、比較的大きな湖の北岸にある。郡中心地から東に13キロの地点。ホトアイルは5世帯から構成されているが、この場所にいるのはボルガリドの長男と次女の婿で、母子群の放牧を担当している。夏営地から2キロほど北側の台地上には、ボルガリドの長女の婿がゲルを2つ構えて、こちらで不妊・去勢畜の群れを放牧し、ボルガリドは30数キロ南方の春営地、次男は春営地の東約5キロにある冬営地にいる。夏営地付近での畜群分割は早魃のためであり、冬営地・春営地に人が残るのは、燃料や家畜の防寒用に使用する畜糞の泥棒対策である。そのため、家畜の大半は夏営地2箇所連れてきている。

1998年

営地は97年と同じく「エンゲルブルド」。ただし、本年は草の状態が良いため、ボルガリドの長男、次男、長女の婿の3世帯が1箇所にとまり、台所用のゲルを含めて4つのゲルが並んでいる。ボルガリドは春営地、次女の婿は冬営地に残留。

1999年

本年も営地は「エンゲルブルド」。水も草も良い、との事であったが、本年は98年より湖が小さくなっている。ボルガリドの長男、次男、長女の婿の3世帯、4つのゲルが1箇所に並ぶ。ボルガリドは春営地、次女の婿は冬営地に残留。

#### 事例13（2バグ、代表者バター）

1998年

地名は「バローンサラー」、第2バグ中心地「シャルブルド」から40キロ

北、ハルザン郡との境界近くにある。ホトアイル構成はゲル5つ、3世帯。

1999年

第2バグ中心地でバグ長より、バターは「バローンサラー」にいと聞いたが、遠方であるため、時間の都合より訪問は割愛した。

#### 事例14（2バグ、代表者ドラムラクチャー）

1998年

地名は「ソブラガ」、第2バグ中心地から北に15キロ。ホトアイル構成世帯はゲル2つ、2世帯。本年はソブラガに夏営地があるのはここだけ。年によって違うが、普通の年はこのホトアイルだけがここに夏営地を置く。調査に同行した第2バグのバグ長によれば、家畜というのは慣れた土地の草を食べたがるものなので、この家は早魃のときでもここに来る、との事であった。

1999年

昨年場所より東に数100メートルずれただけであり、地名は「ソブラガ」。ホトアイル構成も昨年と変わらず。

#### 事例15（2バグ、代表者ダワクチャー）

1998年

地名は「ピンティ」、第2バグ中心地より北に32キロ、県中心地へ向かう道から200メートルほど西に入った場所にある。ホトアイル構成はゲル5つ、4世帯。

1999年

昨年の営地と同じく「ピンティ」にあり、昨年同様に県中心地へ向かう道の傍にある。ホトアイル構成も昨年と変わらず。

#### 事例16（2バグ、代表者ガントゥムル）

1998年

地名は「チャバンシャンド」、第2バグ中心地の北東25キロの地点。ホトアイル構成はゲル2つ、1世帯。

1999年

地名は「トージョーギーン＝ゴビ」、昨年より7キロ北西へ移動。ホトアイル構成は昨年と変わらず。

#### 事例17（2バグ、代表者アルタンゲレル）

1998年

地名は「ハルタリン＝ホダグ」、第2バグ中心地の北東約20キロ強の地点。ホトアイル構成はゲル3つ、2世帯。

1999年

地名は「ツァガーンホショーニイ＝アル」、シャルブルドの北西3キロの地点。アルタンゲレルには小学校2年生の子供がいて、バグの小学校に通っている。そのため、バグ中心地の近くへ来たという。ホトアイルの構成は昨年と変わらず。

## 考 察

まず、最初に、本論の考察対象になった当地の種類が、夏当地であるという点を確認しておく必要がある。現在のオンゴン郡では、当地選定は、基本的にホトアイルの代表者の判断で行われているが、移動範囲は通常、所属するバグの内部に制限されている。特に、冬当地・春当地は、基本的にバグ長が認可した一定の場所で行うよう、行政側より定められている。ただし、本論の事例で春当地の箇所が「不定」となっているオチルバト（事例8）の場合は、96年から98年までダリガンガ郡へオトルへ出ている、例外的存在である。こうした例外を可能にしている事情の詳細は未確認であるが、何らかの個人的関係に基づいているものと想像される。

こうした、行政側より比較的厳しく管理されている冬・春当地に対し、夏・秋当地は、バグ内であれば場所は自由であり、毎年、バグ長に当地の場所を申告するだけで構わない制度になっている（尾崎 1999：66-67）。そのため、夏当地は、牧民の主體的な判断によって、毎年の当地の場所を簡単に変更しうる

社会的条件が整っている種類の営地である、といえるだろう。

さて、こうした夏営地の変動であるが、厳密な意味で、あるいは日本人の常識的な感覚で、と言い換えても良いが、前年と全く同じ場所に営地を構える事例は皆無である。少なくとも、100メートル（事例9）から1キロ程度（事例3、6）のずれは存在するが、こうした事例では、インフォーマント自身「同じ場所」と認識しているので、これらは営地の変動とは見なし得ないだろう。なお、こうした微小な移動の理由については「前年と全く同じ場所には設営しないものだ」（ツェベグ：事例5）というレベルの回答しか得なかったが、最小で100メートル程度である点から考えて、草原の劣化や害虫の発生という環境的な理由よりは、文化的・心理的な理由、例えば不浄感などを想定した方が無難であろう。

一方、こうした微小な移動を除いた、インフォーマント自身が認める営地の変更は、17事例中、7事例について見られた。変更前と変更後の営地間の距離は3キロ強（事例11）から約20キロ（事例7、17）までと様々であり、ここから一般的な傾向を見出すことは不可能であるが、確かなことは、最低でも3-4キロは離れないと別の場所、すなわち営地を変更したとは見なさない空間認識を牧民が持っていることである。

また、ホトアイルの代表者自身は移動しないが、ホトアイル成員の一部が一時的に畜群を分割し、2キロほど離れた地点で放牧を行うという事例が3例見られる。つまり、後者も変動の一形式として考えるなら過半数、これをカウントしなくても4割以上の事例で、年による営地の変動が生じているといえる。これはもちろん、裏を返せば、カウントの方法次第では過半数の事例で営地の変動は発生していない、ということでもあるから、やはりランダム論とは程遠い結果である。やはり、「夏営地の場所というのは大体決まっており、慣れた場所からあまり遠くへは出かけないもの」（アサルマー：事例11）であり、それは「家畜というのは慣れた土地の草を食べたがるもの」（第2バグ長：事例14）だからである、という論理が卓越しているのだ、といえる。

それでは、営地を変更する理由は、どうであろうか。今回の調査結果からは、「子供がバゲの小学校に通っているため、バゲ中心地の近くへ来た」（事例17）という、教育上の理由を挙げている一例を除き、「家畜用の水の確保の問題」（事例2）、「家畜に飲ませる水が得られる湖・池が多く、草の状態も良い」（事例7）、「ハエ・蚊が多い」（事例11）と、営地の自然環境、特に牧畜と密接にかかわる部分での理由付けによる事がわかる。

1998年に比べて1999年および1997年が乾燥した年で、水の確保が困難であり、草の生育が悪かったことは、前述「本論の調査地について」の項で述べた概括や、ウィゼンギーン＝ツァガンノールの大きさの変化（事例12）の様子からも明らかである。また、ホトアイルの分割も、「雨が少ない」（事例4）、「旱魃」（事例12、1997年）という、完全な営地の変更と同様の、牧畜の便宜によって発生している。こうした点から、モンゴルの「遊牧」すなわち移動牧畜という生業が、自然環境に臨機応変に対応しうる、あるいは対応せざるを得ない性質のものであることが確認できるだろう。

ただし、彼らの営地の変動を、単に水の確保や草生という、生態的な要素に還元してしまうだけでは、まだ問題が残る。この点については、梅棹も、他人が移動した跡地に別の牧民が移動してくる例を挙げ、移動と「草の経済」を結び付けて理解することに疑問を呈しているが（梅棹 1990 a : 47-48）、本論が挙げた事例中にも、モーノンフーは1998年の営地を1999年には使用せず別の場所に移動したのに、その跡地を他人が営地として利用する例（事例1）や、1998年には7つのホトアイルが夏営地を構えた「ドゥルブンホダグ」は、1999年にはバートル（事例7）など5ホトアイルが別の場所に夏営地を変更した一方で、新たに2ホトアイルが夏営地として使用するなど、ある地点の水や草生の条件が悪化したために営地の変更を行った、というインフォーマントの言説だけでは納得しがたい、つまり水や草生の条件が悪いはずの場所になぜ、わざわざ移動してくるのか、という素朴な疑問を禁じえないケースが存在するのである。



こうした現象を解釈するための、ヒントとなりうる事例は、オチルバト（事例8）の営地変更であろう。彼の場合、営地の場所が、常に数カ所のホトアイルが目に入るほど密集した1998年の「イフボラギン＝ズーンシレー」から、1999年には周囲にホトアイルが見当たらない「イヘル＝ツェンゲレグ」へ移動している。もとより、インフォーマントが、この事実を移動の動機として明言したわけではないのだが、上述の「ドゥルブンホダグ」の例を見ても、1998年には多くのホトアイルが集中した地点を、自然環境の条件が悪い1999年には避ける、という営地選択の嗜好が働くことを想定することは可能であろう。

逆に、こうした観点から考えると、恐らく本来的には良好な夏営地たりうる「ドゥルブンホダグ」などの地点が、上述の営地選択の嗜好により「過疎」になると判断した他のホトアイルの代表者が、そうした間隙を狙って、いわば「逆張り」の行動を取ることは十分論理的なのではなかろうか。

また、ドラムラクチャー（事例14）の行動も示唆的である。彼のホトアイルの夏営地は、通常、一つのホトアイルで使用している場所である。そういう場所で放牧を行っている彼だからこそ、早魃の年にも家畜に慣れた土地の草を食べさせることを優先して、同一箇所でも夏営地を構えうるのだといえよう。なお、ドラムラクチャーは、家畜私有化以後に家畜を増やし、今や第2バグで最多、ソムでも有数の、1人で1000頭あまりの家畜を有し、農牧省の大臣から表彰状をもらうほどの優秀な牧民である。この事実は、1999年程度の気候ならば、単純に乾燥が原因で牧地を放棄せざるを得ないほど水や草生の状態が悪化しているわけではない、ということを示しているといえよう。少なくとも、この優秀な牧民は、早魃だからといって営地を変更する必要はない、と判断しているのである。

つまり、問題は単なる水や草生の良否ではなく、むしろそうした資源と、それを利用する家畜数のバランスなのである。もちろん、資源が十分豊富にあるときは、「イフボラギン＝ズーンシレー」や「ドゥルブンホダグ」など、家畜用の水の確保や交通アクセスなどの点で魅力的な場所にホトアイルが集中して

も、そのバランスに破綻を来たさない。ところが、一定以上の乾燥に見舞われたとき、牧民はそのバランスの破綻を感じ取り、それを考慮に入れた行動に出るのではないだろうか。ただし、ここでいう「一定」とは、多分に主観的な基準である可能性が高そうに思われる。また、ホトアイルの分割も同様に、乾燥時の集中回避行動の1バリエーションとして理解できるだろう。

また、こうした、早魃になると戦略的行動の必要性が高まる、という事実を考慮に入れたとき、現地の牧民が、雨が原因で大量の家畜を失ってもなお、雨の多い、つまり草生の良い冷涼な夏が「良い夏」である、とする認識に対する、より深い理解が得られるのではないだろうか。つまり、オンゴン郡のような、早魃がむしろ「平年」であるような地方においては、まず第一に、水と草生が豊富で放牧が楽で、他のホトアイルの動向に気を使う必要がなく、心理的に安楽でいられることが「良い夏」の内実なのだろう。

最後に、オンゴン郡の事例からもう一度、當地固定論と當地ランダム論について考えてみたい。既にいくつかの事例で見たように、牧民自身は、自らの言説のレベルにおいて、どちらかといえば當地固定論を支持するようであるし、行動レベルにおいても、1998年にホトアイルが集中した「イフボラギン＝ズーンシレー」や「ドゥルブンホダグ」のように、条件さえ許せば行きたい「意中の場所」が存在するように思われる。平原地帯といっても、微視的に見れば、気候はともかく水や草生などについては、生態環境の差異を小さいながらも見出しうるし、「慣れた土地」という発想は、仮に平原地帯が生態環境の均質な空間であるとしても、それを分節化するものである。さらに、何より交通アクセスなどの社会環境まで視野を広げれば、平原地帯は牧民にとって決して均質な空間ではないため、平原地帯といえども「意中の場所」が存在することは奇異ではない。

そのため、もし、毎年彼らの考える「良い夏」が続くなら、恐らく、行動レベルでも當地固定論が成立するのではないだろうか。言いかえるなら、當地固定論は、オンゴン郡の牧民にとって、理想レベルに属する當地論であるといえ

よう。こうあって欲しい、こうあるべきだ、という議論において、當地固定論は正しい。

しかし、現実には、オンゴン郡は、3年のうち2年も早魃、つまり理想的でない状態に見舞われるような地方である。その意味で、現実レベルでは、當地固定論はあまり説得力を持たないことは、上述の事例群における當地の変動という事実が示しているとおりでである。ただし、同様にランダム論が成立しないことも既に述べた。現実レベルでもやはり、固定論的な理想の影響は少なからず存在する。さらに、アムラーのホトアイル（事例2）では、1997年と1999年の當地が同じ場所であり、あるいは早魃時ですら、ある程度、當地を構える蓋然性の高い場所が決まっているのではないかとさえ思えるのである。今回の調査では、この問題についてさらに検討できるだけのデータは得られなかったが、今後はこうした、いわば「當地オプション論」とでも呼ぶべき可能性を考慮する必要があるだろう。

オンゴン郡の牧民の當地選択には、変更を阻害する要因と、変更を促進する要因という、相反する方向性の力学が存在する。前者は理想レベルにおける、「意中の場所」への固執であり、後者は現実レベルにおける、水や草生などの資源と家畜数とのアンバランスである。両者はいずれも、究極的には牧民の主観的認識であり、あるホトアイルの代表者が、前者を後者が上回ったと判断したとき、ホトアイルの當地変動が発生するのである。そして、この當地の変更先は、個々のホトアイルの戦略的判断に基づくものである。さらに、ホトアイルに属する個々の世帯レベルでは、別のホトアイルへの参加という選択も開かれているわけであり、こうした多様な集団レベルにおける力学の総和によって、モンゴル牧民社会の移動性が生み出されている、といえるのではなからうか。

本論は、平成11年度笹川研究助成による研究「南北モンゴルの近代化プロセスに関する比較研究——ダリガンガおよび北部シリングルの事例——」（研究代表者：尾崎孝宏）の成果の一部をなすものである。

## 参考文献

- バダムハタン（編） 1987 『モンゴル人民共和国の人類学1』科学アカデミー（モンゴル文）。  
後藤雷男 1968 『内陸アジア遊牧民社会の研究』吉川弘文館。  
金岡秀郎 2000 『モンゴルを知るための60章』明石書店。  
関東都督府陸軍部 1915 『東蒙古』宮本武林堂。  
小長谷有紀 1996 『モンゴル草原の生活世界』朝日新聞社。  
満鉄北支経済調査所 1940 『蒙疆牧野調査報告』満鉄。  
満鉄鉄道總局 1938 『呼倫貝爾畜産事情』満鉄鉄道總局。  
三秋尚 1993 「牧畜と食生活」日本・モンゴル友好協会（編）『モンゴル入門』三省堂，53-108  
ページ。  
小貫雅夫 1985 『遊牧社会の現代』青木書店。  
尾崎孝宏 1999 「世帯・親族と地域社会」島崎美代子・長沢孝司（編）『モンゴルの家族とコミュニ  
ティ開発』日本経済評論社，51-73ページ。  
竹村茂昭 1940 「蒙地の話」『蒙古研究』2(4):1-33。  
梅棹忠夫 1990 a 「回想のモンゴル」『梅棹忠夫著作集 第2巻』中央公論社，1-86ページ。  
梅棹忠夫 1990 b 「乳をめぐるモンゴルの生態 I」『梅棹忠夫著作集 第2巻』中央公論社，181-211  
ページ。  
梅棹忠夫 1990 c 「内蒙古牧畜調査批判」『梅棹忠夫著作集 第2巻』中央公論社，157-180ページ。  
Vreeland, H. H. 1954 *Mongol Community and Kinship Structure*. New Haven: HRAF.